

〈研究ノート〉

現代学生の特徴と学生相談についての一考察

問題や症状が維持され、変わらない学生の姿から 見えてくるもの

川上華代 *KAWAKAMI Hanayo*

- はじめに
- 1 — 変化する学生像
- 2 — 近年の学生相談の傾向と学生支援についての検討
- 3 — まとめと今後の課題
- おわりに

【要旨】本稿では、「問題や症状が維持され、変わらない学生の姿」に疑問を持ち、現代学生の心理的特徴とその支援について先行研究を概観した。多くの先行研究から、現代学生の心理的特徴として、葛藤を抱えられない断片的なこころの構造があり、身体化や行動化が生じやすいというメカニズムが見出された。また、そのようなこころの構造や現代の密着した親子関係などによって、主体性が育ちにくく、修学・進路の課題を抱えやすいことも示された。学生相談では、これらの特徴を理解した上で、洞察を促す従来の心理療法モデルに固執するのではなく、またニーズや要求に即座に応じるサービスの支援に偏ることのない、柔軟で粘り強い支援を行っていくことが重要であるといえる。また学生の心理面・修学面での支援を一層有効なものにするためには、学生相談室の活動のみに留まらず、学内全体の学生支援体制を模索していくことが望ましいといえる。

— はじめに

大学生に関わる仕事をしていると、「最近の学生は覇気がない」「まじめな学生が多い」「何を考えているかわからない」等、近年の学生についてさまざまな声が聞えてくる。筆者はこの10年間複数の場で多様な学生たちと出会ってきたが、学生や相談の傾向が少しずつ変化しているように感じている。学生相談というと、うつや自殺、自傷行為、発達障害等、一見目立った症状や行動に目が行きがちであり、これらの問題への対応は時に緊急を要し、即時的な判断が求められるなど対応が難しいという認識がある。緊急対応を要するケースは依然として減っているわけではないが、もう一方で相談や支援活動が行われているにもかかわらず、なかなか問題の改善が見られないケース、自傷他害の危険性は少ないが、状況が変化しないまま卒業を迎えるケースが増えているように感じている。体感しているものを敢えて言葉にするなら、「重苦しさ」「主体性の不在」といったものだろうか？ 通常はカウンセラーとの対話を通じて、学生たちは自分自身のあり方について考えたり、捉え

直しを行ったりして次のステップへと進んでいくのだが、最近は「自分の問題を表現できない学生」や「自己理解の過程がうまく進まない学生」が増えているように感じる。また、自己理解はできているが、次のステップである問題解決への理解や行動を起こすといった自発的な動きが見えづらい学生にも多く出会うようになってきた。このようなケースに多数遭遇し、カウンセラーの方が停滞感や息苦しさを感じることも多く、「一体これは何なのか?」「この現象をどう理解すればいいのか?」と疑問を持つに至った。そこで本稿では、「問題や症状が維持され、変わらない学生の姿」に疑問を持ち、現代学生の心理的特徴とその支援について臨床的、実証的研究を含めた先行研究を概観することとした。本稿では特に「主体性のなさ」「変化のなさ」等の現象に着目し、現代学生の心理的特徴の背景や現状を探るとともに、学生支援のあり方についても検討を試みることにする。

1 —— 変化する学生像

(1) 背景

青年期は子どもから大人への移行期であり、さまざまな体験を経て成長し、自立の道を進んでいく。従来、青年期の自立は、思春期における第二反抗期に象徴される両親からの精神的な離乳を経て、自我同一性を模索し、確立するとされてきた (Erikson, 1959)。したがって、青年期は「自分はどのような人間か?」というテーマにぶつかり、悩み、葛藤を抱えながら大人へと成長する時期であるといえる。しかし、近年は高等教育を取り巻く時代的变化、学生が育ってきた社会環境、学生の家族関係等の変化から、「若者が自立するための道筋そのものが不透明になっている」と言われている (大石・松永, 2008)。それに伴い、大学生の自己のあり方に関して、「多様化・質的な変化」を指摘する知見も多く見られるようになってきた (渋川・松下, 2010)。

まず、学生を取り巻く要因について見ていくことにする。高等教育を取り巻く時代的变化とは、少子化・高学歴化の影響や大学・短期大学への進学率の上昇とそれに伴う多種多様な学生の入学が挙げられる (文部省高等教育局, 2000)。学生の層が多様多様になることにより、学生の傾向や彼らが抱える問題にも広がりが出てきたといえるだろう。そして、現在の学生が育ってきた社会環境として、IT化による情報化とバブル崩壊後の経済・雇用状況の変化、震災やテロなどの国内外の事件や災害の影響等が挙げられる。苫米地 (2006) は、「国の内外を問わず安全や安心、信頼が大きく揺らいでいる」と述べ、社会状況と学生の心理との関係性について「社会状況の変化の中で、その事情が複雑化し、学生たちの心身の揺れの振幅が大きくなっている」と締めくくっている。また、家族関係の変化として、世代間の境界が曖昧な「一卵性親子」(福島, 2000) や、過剰なレスキューを行う「ヘリコプター・ペアレント」と呼ばれる現象も生じ、学生本人の自立を妨げるマイナス要因として捉えられている (高石, 2010)。このような背景から、親と一体化し主体性が乏しく、自身の体験を語れない若者が増加しており、進路や就職を考える時点で移行がスムーズにいな

い課題を持つ人々 (高石, 2009/2010) が存在することが推察される。その他、虐待やドメスティックバイオレンス等の問題も深刻であり、家族が内包している問題が学生相談に持ち込まれるケースもしばしば見かけられる。家族関係と学生生活は密接な関係があり、学生支援や学生対応の際に見落としてはならない要因であるといえるだろう。

(2) 近年の大学生の諸特徴

上述の背景より、さまざまな文献で「大学生の多様化や問題の複雑化」が挙げられている。ここでは、複数の文献から浮かび上がってくるキーワードをピックアップし、それらについて整理を試みることにする。

①心理面について

〈悩めない大学生と身体化〉

2000年以降の文献では、「悩めない大学生」の増加を指摘するものが非常に多い。

苫米地 (2006) は、近年の大学生の心理的特徴として、葛藤を抱えたり、自分の感情と向き合うことができなくなってきていると指摘し、悩むというレベルを乗り越えて、すぐに「落ち込む」あるいは「身体化する」傾向が強くなっていると述べている。苫米地 (2006) は平木 (1993) を引用して、日本の大学生の心理的特徴の変化を論じているが、これを図式化すると表1のようになる。

この表から、大学生の心理的特徴が、エリクソンの提唱した青年期の課題「自我同一性の獲得」に向けて悩み苦しむという葛藤のある状態から、時代の変化に伴って逸脱、抑うつ感へと移行し、徐々に「悩めない」状態へと変化していることが読み取れる。

下山 (2006) は、20世紀後半以降、臨床場面では行動化を主とする人格障害が増加し、一般の青年においても神経症的な「悩み」が語られることが少なくなったと述べ、一般の大学生の心理的問題も、閉じこもりや無気力、あるいは心身症や摂食障害という身体化も含んだ行動化として表現されることが多くなったと指摘している。

福田 (2007) は自身の臨床体験から、一昔前なら18~22歳は立派な成人だったが、今はそうはいえないと述べ、訴えが不明瞭で何を悩んでいるのか、本人自身もわからないケースもよくあるとしている。また、高石 (2009) も、2000年を過ぎたころから、従来のアイデンティティを模索する悩みやそれに付随する症状 (対人恐怖、強迫、離人症など) が少なくなっており、新たな来談学生の典型像として、「問題解決のハウツーや正解の提供を求める性急な学生」と、「漠然と不調を訴え、何が問題なのかが自覚できていない学生」の二極

表1 日本の大学生の心理的特徴の変化 (平木 (1993), 苫米地 (2006) を図式化)

年代	1970年代	1980年代	1990年代以降
課題や問題	自分探し	境界性人格障害等の逸脱	抑うつ感
心理的特徴	同一性拡散	未熟な人格の発達	悩めなさ・逃避・行動化

化が見られると指摘している。興味深いこととして、いずれの学生も「時間をかけ、主体的に悩めない」点で共通していると述べ、その背景に、自分の内面の情動を「言葉にする」力が育っておらず、心理化して悩むより行動化・身体化に至るプロセスがあるとしている。

これらに共通するのは、「学生の悩めなさ」と「身体化・行動化」であり、現代学生の大きな特徴であると理解すべきであろう。筆者の臨床体験においても、苦痛や症状を訴えることはできても、「何とかしよう」とする心の動きが見られず、本人の気持ちや動機を尋ねても、「わかりません…」と返ってくるケースに遭遇することがある。そのような学生に向き合うと、なかなか問題解決のきっかけが得られず、悶々としてしまうこともあった。筆者の経験とこれら複数の文献は非常に重なるところがあり、今、学生支援や学生相談が、現代学生が表現する「悩めなさ」という非常に大きな課題に直面していることが示唆されているといえる。

〈こころの多面化と断片化〉

上述の学生の悩めなさに関連して、現代の若者のこころの「多面化」「断片化」について論じられた文献も多数ある。

高石（2009）は、現代の若者の「わたし」は断片化しており不連続であると述べ、青年期の人格構造が1980年代後半とそれ以前では異なることを指摘している。高石によると、1980年代前半までの学生は、S.フロイトが提唱したこころの構造論に沿って理解することができるとしている。そのメカニズムは、人格の統合性を保っている自我は衝動が生じると葛藤を起し、都合の悪い欲求や傷つきは無意識の領域に抑圧されるというものであり、「抑圧モデル」「葛藤モデル」（大山, 2009；鍋田, 2007）と呼ばれている。一方、1980年代末以降の学生のこころの構造は、自我の統合性が相対的に希薄で、こころの中に混じると不都合な悪い要素は衝立で仕切るように切り離し（解離）、ばらばらのままに併存させているという図式で表されるとしている。こちらのモデルは「解離モデル」「欠損モデル」（大山, 2009；鍋田, 2007）と呼ばれている。

同様に成田（2001）も、若者の精神病理の特徴と変化をまとめ、「自己という一つの人格の統合を保持し、そのなかで葛藤を体験するのではなく、統合を放棄することで内的葛藤を体験せず、自己の一面あるいは一部を別々に生きるというあり方が増えてきている」と述べている。香山（2001）も大学生における自己の変化を「人格の多重化や解離現象」として取り上げ、「一過性の流行ではなく、自己のあり方を大きく変えるような本質的な変化の予兆ではないか」と指摘している。

また高橋（2010）は、対人関係に困難を感じて不適応に陥っている事例から、学生が主体性なく相手や状況に合わせようとしている状態であることを示し、「対人関係における傷つきや居心地の悪さを避けるために、相手の出方によって自分の態度を変化させ、それによって他者と一見円滑で、かつ良好な人間関係を築こうとするあり方が、カウンセラーとの関係においても生じる可能性がある」と指摘し、相談場面におけるカウンセラーとの関係性にも留意すべきであると述べている。

桐山 (2010) は、このようなところの「多面化」「断片化」の特徴の背景を振り返り、IT化による知識や情報の外部化、ゲーム等でのバーチャルリアリティの浸透、医療技術の進歩による移植やクローン技術、美容整形等の普及など、社会の急激な変化によって、「人間を全体としてではなく取り替え可能なパーツととらえる傾向がでてくるのも無理もない流れといえよう」と考察している。そして、理解のあり方として、「自己の分化から統合へという青年期の課題を放棄した、もしくは分化したものの統合に失敗した結果としてとらえることで、若者の生き方を支援できるのではなからうか」と述べ、自分を統合していく際には、「それらすべてよいも悪いもひっくるめてあなただよ」と受容し、共感し、ばらばらの「わたし」を一つに包んでくれる他者の存在が必要であるとしている。

筆者も相談室で、自分の問題を他人事のように飄々と語る学生を目のあたりにし、その実感のなさやバラバラ感に愕然とすることがある。以上の文献から、学生の心理的特徴として、ところの「多面化・断片化」があり、葛藤を自分のこととして引き受けられない現象を引き起こしていると理解することができる。今までは、学生の他人事的な様子に筆者自身が焦りや苛立ちを感じていたが、改めて冷静に大学生の「ところの多面化・断片化」として捉え直すことで、学生の現状を理解する契機を得ることができた。今後は高橋 (2010) や桐山 (2010) の示唆を受け止め、「彼らの本質的な支援や成長につながることは何か？」を考えて対応していきたいと思う。

②修学・進路について

学生相談には、心理的な問題についての相談だけでなく、修学や進路についての相談も多く寄せられる。以下、修学や進路に関しての現代学生の心理的特徴について見ていくこととする。

〈休・退学率の増加〉

内田 (2009) によると、国公立大学の休学・退学率は1979年の調査開始以来徐々に増加しており、その理由として、勉強意欲の喪失・減退、単位不足、進路変更など、大学教育に対して消極的な理由を示す群が最も多く、積極的な理由のある学生の2～3倍であるという。これを受けて宇留田 (2006) は、高等教育への進学率の増加とともに、進学目的が不明瞭なまま入学してくる学生の存在や高校までの学習と大学における学習で求められることのギャップ (受け身の学習から能動的な学習へのスタイルの変化) についていけず、学習意欲が減退してしまう学生の存在があると述べ、「大学における学び方を学ぶ」ための支援が必要であると指摘している。また、昨今の就職状況の厳しさが、学生の将来に対する不安感を強めており、その不安感も意欲喪失の背景になっていると考えられている (藤川, 2012)。その他、大学までに不登校を体験している学生などはそれまでの学習が十分でないこともあり、正規の授業だけでは理解が追いつかないケースも見受けられ (福田, 2007)、修学支援が必要とされている。三川 (2010) は、修学の進み具合は学生生活のパロメーターとなり、修学がうまくいってないことは、その学生が何らかの個人的問題を抱えていることを反映

していると、修学の話はさまざまな個人的内容に入っていき、際の入り口になると述べている。

〈巣立てない大学生〉

休・退学および進路の問題に関連して、高石（2009）は、自宅に引きこもる学生や、「内定うつ」と呼ばれる社会に出る不安からうつ状態やパニック症状などを呈する学生たち、また社会に出ることを先送りしたいという心理が働き編入学、再入学、進学などの進路選択をする一群の学生が存在すると述べ、高等教育を離れてからの、離職者や社会的引きこもりの増加が懸念されると指摘している。そして、高等教育における学生支援とは、単に人格形成の援助、成長の支援というだけでなく、社会へ送り出すこと、すなわち「学ぶ者から働く者へ」「与えられる者から与える者へ」の移行を助けるという使命を担っていると論じている。

本学の学生相談においても、留年を繰り返す学生や、進学による先送りを行う事例があり、「巣立つこと」の難しさを実感している。これら修学・進路に関する問題について、学生のニーズに合わせた支援を行うのはもちろんのこと、その背後にある現代学生の特徴をふまえ、その構造を把握して対応していくことも重要になると思われる。同時に、高石が述べているように、大学が修学・キャリア支援についてのヴィジョンを持ち、学生の自立を促すための継続した教育システムを構築していくことが求められているといえる。

③親子関係について

〈家族力の弱体化〉

大学生の心理的特徴の変化と親子関係との関連性を指摘する文献も多く見られる。

苫米地（2006）は最近の大学生の事情として、家族力の弱体化と大人のモデルとの接触の少なさを挙げ、生きていく上での支えとなる考え方や価値観を取り入れる機会が乏しくなっていると述べている。

〈密着した親子関係〉

また、高石（2009）は、近年では履修登録から、就職先の決定に至るまで、親が関与する例が目立つようになったことを挙げ、学生が「巣立てない」現象と親側の「子離れしない」現象は同じ問題の表裏であるとして、親子関係の密着を指摘している。そして、「従来の学生理解の枠組みを解体し再構築しなければならない」と述べ、近年増加している保護者対応を「なくすべき困った課題」と捉えるのではなく、今日の親子関係の構造を理解し、親子を一つのユニットとしてとらえることと、親を視野に入れた「学生支援」が必要であるとしている（高石, 2009/2010）。

湯ノ口・田中（2011）も親子関係と進路相談の関係性に着目し、親の期待を過剰に取り入れてしまい、やりたい職業を見い出せず転職を繰り返したり（長峰, 2003）、親との価値観の相違が明確になって不安のあまり目の前の選択に飛びつく（安住, 2006）、といった親へ過剰な依存や葛藤等による進路選択の困難さを報告している。湯ノ口・田中は、進路選択が

親子関係の未解決の問題を解決する糸口になる可能性があるとして、親子関係の振り返りを通して青年期の個体化を促すアプローチの有効性を示唆している。

このように、学生の心理面・修学面等における親子関係の影響は非常に大きいといえる。筆者は学生個人の訴えの中に、彼らの抱える親子関係の問題を見出し、どこまでを本人の問題として扱うかに戸惑いを覚えることもある。学生相談室という限られた空間の中で親子関係のすべてを扱うには限界があるが、常に頭の隅でその影響や関係性についても思いを巡らせ、学生の問題と切り離さずに検討していくことが重要であると感じている。

④その他

〈きまじめさ・頑固さ〉

その他、筆者自身が感じている現象として、授業の出席や友人関係に固執する「きまじめな学生」が増加しているように思われる。この現象も主体性のなさや自我の弱さに関連すると思われるが、物事を複数の視点から捉えることができず、自分中心の視点に固執し、理想を追求しようとして挫折するパターンを繰り返す学生たちがいる。彼らは一見従順に足繁く相談室を訪れるが、カウンセラーの見解や助言等には耳を傾けず、理想とのギャップやあきらめなどの主観的な苦痛を訴え続ける。「きまじめ」で「頑固」であり、「強迫的に理想を追求」するが、自分のやり方に非常に固執しているため「変化を望まない」ように見える。別の見方をすると、こころのゆとりや柔軟性が失われてしまっているともいえるだろう。したがって、臨床場面では非常に「硬さ」「頑固さ」「重さ」を感じるのである。広瀬(2009)は、大学生の強迫傾向(生真面目さ)と進路未決定との関連性を調べ、強迫傾向の高い学生は職業選択にあたり、どうしてよいかわからず不安になったり、決めることを避けたり、安易な決定に走りがちであることを示した。その他、強度の強迫性が大学生生活上の不適応を呈するという見解も示唆されている(小柳, 1999; 福田, 2007)が、「まじめ」の要素には勤勉性や意欲と結びつくポジティブなものもあるためか、ネガティブな側面に着目した文献はそれほど多くはなく、また、筆者が感じている「頑固」というキーワードは日常用語でもあり、ほとんど研究が行われていないため、今後もこれらのキーワードについて探索し、理解を深めていく必要があると考えている。

以上、複数の文献から現代学生の特徴としてさまざまな側面があることが示されたが、現代学生の心理的特徴として、葛藤を抱えず、即時的に自己の側面を分断・解離させる(=悩めない)構造にあり、それによってこころの状態を言葉に表すことができずに身体化する学生が増えるというメカニズムを理解することができた。また、同時にそのような特徴や現代の密着した親子関係から主体性が育ちにくい状況にあり、それに伴って修学・進路の課題を抱えるという悪循環的な関連性も浮き彫りにすることができたといえる。これらの特徴を「未熟」「退行的」と言い切って嘆くのではなく、その背景にある社会の変化や重苦しさを理解した上で、これらの特徴が顕在化してきていることに着目すべきであるといえる。非常に難しいことであるが、洞察を促す従来の心理療法モデルに固執するのでは

なく、またニーズや要求に即座に応じるサービスの支援に偏ることのない、カウンセラー側の柔軟な心構えと粘り強い支援が重要であると考えられる。

2 —— 近年の学生相談の傾向と学生支援についての検討

(1) 近年の学生相談の傾向

高石・岩田(2012)は、カウンセラーが学生の見立てに用いるものさし(判断の枠組み)は、その時代特有の病理やメンタリティに応じて変化していく相対的なものであると述べ、カウンセラーが取り組んだ現象の変遷(アパシー→人格障害→解離性障害)と学生の内面の防衛機制の変化(抑圧→分裂→解離)について論じている。これらを図式化すると表2のようになり、表1とほぼ合致している。

社会的な背景や学生像の変化を受けて、1990年代後半以降、新しい学生相談のモデルが相次いで提起されている(吉良,1998;藤原,1998;斎藤,1999)。新しいモデルでは、学生相談活動の範囲を「一部の不適応学生を対象とした心理治療を中心機能とするもの」から、「教職員も含めた大学コミュニティ全体を対象とした全人教育・発達支援の機能を含むもの」へと拡大することを目指している(宇留田・下山,2002)。また、学生相談が「大学教育の一環」であることが明示され(文部省高等教育局,2000)、学生相談機関の活動はますます拡大しているといえる。学生相談の教育的・育成的な機能の拡大のために、修学支援や生活支援等のさまざまなサービスを充実させることが必要となり、この10年で心理職と教職員との連携、協働に関心が寄せられるようになってきている(藤川,2012)。吉武(2010)は、近年の学生相談機関の役割が個別カウンセリングに留まらず、予防活動や危機対応等に拡大していることを示し、それらはいずれも教職員との連携によってはじめてカウンセラーが実現できると述べている。また斎藤(2006)は、近年の学生の問題に対応する際、旧来の面接室に依拠したクリニックモデルによる援助方法や構えでは対処しきれないもどかしさを感じると述べ、専門職(カウンセラー)等と教職員との有機的なつながりが学生相談にとって有効に機能するとしている。

(2) 学生支援についての検討

では、実際の学生支援に上記のような見解や提案をどのように活かしていけば良いのだろうか? 以下3点にまとめて論じていくこととする。

表2 学生相談の中心的テーマと学生の内面の防衛機制の変遷(高石,2012を図式化)

年代	1970年代	1980年代	1990年代以降
学生相談の中心的なテーマ	アパシー 対人恐怖	人格障害 (境界性・自己愛性)	解離性障害 社会的ひきこもり
防衛機制	抑圧	分裂	解離

①学生理解とカウンセリング

現代学生の特徴について調べていくうちに、筆者が疑問を抱いていた「問題や症状が維持され、変わらない学生」についての理解が深まり、今後の支援に重要な示唆が得られた。現代学生の心理的特徴として、葛藤を抱えられない断片的なこころの構造があり、身体化や行動化が生じやすいというメカニズムがある。また、そのようなこころの構造や現代の密着した親子関係などによって、主体性が育ちにくく、修学・進路の課題を抱えやすいことも理解できた。冷静にこれらの特徴を受け止めると、学生が一人前になるにはなかなか厳しく、長い道のりがあると感じられる。それは途方もなく長い道のりであり、希望の光を見出すことが難しいようにも感じる。筆者が面接中や面接後に感じるもやもやとした不安や焦り、苛立ちは、実は彼らのこころの様子が映し出されたものなのではないか、という実感にやっとたどり着くことができた。今までは「大きな出来事があったわけではないのに、なぜこんなに落ち込んだり、気力がないのか？」と腑に落ちない感覚があったが、このメカニズムを理解して事例を見直すと、ようやく「ああとでも大変な思いをしているのだ」という共感が湧いてきた。裏を返すと、彼らの訴えは他者が話を聴いてもなかなか「共感しづらい」という特徴もあるのだろう。このような学生たちと向き合う際、普段カウンセラーとして当たり前に行えることが難しく感じるということにも留意しなければならないといえる。

桐山 (2010) は、自分を統合していく際には、よいも悪いもひっくるめて受容し、共感する他者の存在が必要であると述べている。鳥山 (2006) は、現代学生の特徴を「温泉卵症候群」と名付け、見た目は立派でも中身が半熟であると指摘している。鳥山は相談室の役割を、「彼らの半熟の身をゆっくりと温めて固めてやり、しっかりとした殻が作れるまで、時間をかけて見守ること」と述べている。学生時代は限られた時間であり、のんびりと構えることは難しいが、今後は学生が直接には発しない不安や脆さ、深刻さにも目を向け、焦らずに共感のまなざしを注いでいきたいと思う。その際、カウンセラーの感じる重苦しさや硬さ、焦りや苛立ちのようなネガティブな感情も、彼らの心理状況を示唆する重要なサインとして受け止めることがより深い理解と支援に役立つと考えられる。したがって、「うまくいかない」と立ち止まったときに、「丁寧に学生の状況を理解しているか？カウンセラーが先走りすぎているのではないか？」等、カウンセラー自身の特徴や傾向について振り返りを行うことも有効であると思われる。

また、高石 (2009) が、「悩めない・内面を語れない学生に対し、五感の体験をカウンセラーが共にするような心理教育的グループプログラムや授業を企画・提供し、一定の手応えを得てきた」と述べているように、現在多くの大学で体験的なグループプログラムが実施されてきている。このような守られた場での体験を通して、学生の「主体性」が育まれることが示唆されており、今後の学生支援の一形態としてあり方が示されているといえる。

②学生相談の一環としての保護者支援

高石 (2010) は、現代の親子関係は「密着」と「放棄」の二極化していると述べている。「密着」と「放棄」は一見すると両極のように見えるが、共通点として「親が子どもを自分とは別の人格として尊重して育てることができない」という問題が隠れているように思う。これはとても恐ろしいことであるが、時に親の攻撃性や不安が大学に向かってきて苦慮することもある。モンスターペアレントという言葉が流行して久しいが、親を批判するだけでは何も始まらないし、解決しない。高石のいうように、今日の親子関係の構造を理解し、親を視野に入れた「学生支援」が必要であり、そのためには、「保護者も学生を支える人的資源であり、協働者である」という認識を持って対応することが重要になってくるといえる。今後は保護者の相談も含め、心理教育的なアプローチを用いて青年期の子どもの理解や対応を促す支援が求められているといえるだろう。

③教職員との連携

現代学生の特徴として、こころの多面化・断片化があり、バラバラの自分をそのまま置いている状況があることはすでに述べた。これを学内の学生の姿に当てはめてみると、学生はキャンパスのいろいろな部署に現れ、バラバラにその姿を見せているのではないかと推測できる。また彼らは心理的な背景から修学や進路の課題を抱えていることも多く、相談室だけに留まらない支援を要する学生も多く存在する。そのような学生を支援するためには、学生に対応する者がそれぞれバラバラになってしまってはいけない。また全体の学生の質も変化しているため、従来の修学支援の方法では対応しきれなくなっているのも現状である。多くの文献で論じられているように、現代学生の心理面・修学面の特徴をふまえた学生支援のネットワークづくりや教職員とカウンセラーの連携が必須となるといえる。

以上、近年の学生相談の傾向と学生支援についての検討を行った。①～③はすべて学生支援においては欠かせない要素であり、学生相談室の活動がすでに学生個人の相談に留まらず、幅広い領域におけるニーズや要請を受けて成り立っていることを示している。今後は複雑な現代学生の特徴をふまえ、大学独自の長所が発揮される学生支援体制を模索していくことが望ましいといえる。

3 ——— まとめと今後の課題

本稿では、「問題や症状が維持され、変わらない学生の姿」に疑問を持ち、現代学生の心理的特徴とその支援について臨床的、実証的研究を含めた先行研究を概観し、整理を行った。社会的な背景などさまざまな要因から、現代学生の特徴は変化し、複雑・多様化している。特に顕著な特徴として、「悩めない大学生」「身体化」「こころの多面化・断片化」「親子関係の密着」「休・退学者の増加」「巣立ってない大学生」等が見受けられることがわかった。学生支援に携わる者として、これらの諸特徴を十分に理解することはもちろんのこ

と、洞察を促す従来の心理療法モデルに固執するのではなく、またニーズや要求に即座に応じるサービスの支援に偏ることのない、柔軟で粘り強い相談活動を行っていくことが必要であると考えられる。そのためには、カウンセラー自身の感覚にも耳を澄ませ、冷静かつ丁寧に学生の姿を捉えていくことが重要であるといえる。また学生の心理面・修学面での支援を一層有効なものにするためには、学生相談室の活動のみに留まらず、学内全体の学生支援体制を模索していくことが望ましいといえる。

今回は現代学生の特徴と学生支援についての概観を行ったが、ひとつひとつの要素に非常に奥深く幅広い問題があり、論点を絞ることが非常に難しかった。今後の展望として、臨床的により具体的な示唆が得られるよう、事例を用いて検討を深めていきたいと思う。

また筆者の感じている学生の「頑固さ」については、今回十分な資料が得られなかったため、今後も引き続き検討を行っていきたいと考えている。

— おわりに

「なんで今の学生はこんなに元気がないんだろう?」「ずっと相談に来ているが、あまり変わった様子が見られない……」「何だかすごく焦ってしまうな」等、筆者は最近の相談場面で漠然とした不安感や疑問を持つことが多くなった。そこで、今一度現代の学生の特徴を振り返ってみよう(先人の知恵をお借りしよう)という思いで、今回の紀要の執筆を開始した。実際に臨床を行っている方々にとっては、すでに勉強していること、体験していることであるかもしれない。私自身、頭では現代学生の傾向を理解しているつもり……であった。しかし、それはつもりであり、本質的にクライアントが抱えている悩みやメカニズムというものに、こころを開くことができていなかった。実際に自分の目で資料を読み、事例の経過をたどることでやっと自分なりに納得し、自分の事例を冷静に見直すことができたといえる。カウンセラー自身の感覚(精神分析でいうところの逆転移)に気づき、それをクライアントの理解に役立てることは、心理療法において基本であるといえるが、筆者はクライアントとの関係性の中で非常に近視的になり、直接的な支援に目が向いてしまい、実際のクライアントが抱えている不安や焦りを理解することができなくなってしまっていたといえる。今回の執筆を通して、ようやくクライアントの背景や状況に身を持って思い当たることができた。遅ればせながらこれは筆者にとっては非常に大きな体験であり、収穫であったといえる。本稿が学生支援に携わる方の一助となれば幸いである。

《引用文献》

- 安住伸子 (2006) 学生相談とキャリア教育—こころの成長を進路決定に生かす— 大学と学生,28,21-28.
Erikson,E.H. (1959) *Identity and the life cycle*. International Universities Press. (小此木圭吾訳 1973 『自我同一性』 誠信書房)
藤川麗 (2012) 教職員との協働に基づく学生相談へ 『学生相談必携GUIDEBOOK—大学と協働して学生を支援する— 金剛出版 pp.40-43.

- 藤原勝紀 (1998) 大学教育の一環としての学生相談 河合隼雄・藤原勝紀編『学生相談と心理臨床—心理臨床の実際3』金子書房 pp.56-59.
- 福田真也 (2007) 現代の大学生気質とこころの病気 『大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック 精神科と学生相談からの15章』 金剛出版 pp.11-15.
- 福島章 (2000) 親と子の自立を考える 児童心理, 54(1), 1-10.
- 平木典子 (1993) カウンセリング・ルームからみた学生たち IDE現代の高等教育, 4, 23-28.
- 広瀬香織 (2009) 大学生における強迫傾向 (生真面目さ) と進路未決定の関連について —学生支援の視点から— 四天王寺大学紀要, 47, 75-88.
- 香山リカ (2001) 「いくつもの私」と〈ほんとうの私〉 なだいなだ編 『〈こころ〉の定点観測』 岩波新書 pp.157-173.
- 吉良安之 (1998) 大学教育における新しい学生相談像の形成に関する研究 平成9年度文部省科学研究費補助金基盤研究 研究成果報告書
- 桐山雅子 (2010) 現代学生の心理的特徴 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編 『学生相談ハンドブック』 学苑社 pp.30-34.
- 小柳晴生 (1999) 『学生相談の「経験値」—大学における心理臨床—』 垣内出版
- 三川俊樹 (2010) 相談内容に応じた援助 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編 『学生相談ハンドブック』 学苑社 pp.69-76.
- 文部省高等教育局 (2000) 大学における学生生活の充実方策について
- 鍋田恭孝 (2007) 『変わりゆく思春期の心理と病理』 日本評論社
- 長峰伸治 (2003) 親との葛藤から見たフリーター—複数の事例による検討— 現代のエスプリ, 427, 105-115.
- 成田善弘 (2001) 若者の精神病理—ここ二十年の特徴と変化— なだいなだ編 『〈こころ〉の定点観測』 岩波新書 pp.1-18.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008) 大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成— 日本家政学会誌, 59, 7, 461-469.
- 大山泰宏 (2009) 学生理解のための視点：大学教育研究と心理臨床実践の視座から シンポジウム「学生相談の視点から見た現代の学生とこれからの学生支援」甲南大学学生相談室紀要, 18, 34-40.
- 斎藤憲司 (1999) 学生相談の専門性を定置する視点—理念研究の概観と4つの大学における経験から— 学生相談研究, 20, 1, 1-22.
- 斎藤憲司 (2006) 学生相談の新しいモデル—変動期における指針— 臨床心理学, 6, 162-167.
- 渋川瑠衣・松下姫歌 (2010) 大学生における自己の変動性・多面性の概念について—学生相談における臨床的理解と意義の視点から— 広島大学心理学研究, 10, 171-183.
- 下山晴彦 (2006) つなぎモデルによる学生相談の実際 河合隼雄・藤原勝紀・小川捷之編 学生相談と心理臨床 金子書房 pp.139-156.
- 高橋悟 (2010) 学生相談の視点から見た「適応」について 鎌倉女子大学紀要, 17, 31-41.
- 高石恭子 (2009) 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究, 15, 79-88.
- 高石恭子 (2010) 学生相談の新たな視座—保護者対応から親と子の自立支援へ—平成22年度近畿地区メンタルヘルス研究協議会講演要旨
- 高石恭子・岩田淳子 (2012) 『学生相談と発達障害』 学苑社
- 苫米地憲昭 (2006) 大学生：学生相談から見た最近の事情 臨床心理学, 6, 168-172.
- 鳥山平三 (2006) キャンパスのカウンセリング—相談事例から見た現代の青年期心性と壮年期心性— 風間書房 pp.159-167.
- 宇留田麗・下山晴彦 (2002) 学生相談をめぐるコラボレーションの実践—学生相談の教育的機能の充実

に向けて 現代のエスプリ, 419, 200-209.

宇留田麗 (2006) 修学支援 臨床心理学, 6, 206.

内田千代子 (2009) 大学における休・退学, 留年学生に対する調査 第29報 第30回全国大学メンタルヘルス研究会報告書 pp.70-85.

吉武清實 (2010) 学生相談の近年の傾向と課題 大学と学生, 84, 6-12.

湯ノ口文子・田中信利 (2011) 進路選択と青年期の个体化 学生相談研究, 32, 2, 144-153.

[かわかみ はなよ・和光大学大学院社会文化総合研究科非常勤講師／和光大学学生相談室カウンセラー]